

博士學位論文審査要旨

2013年1月15日

論文題目： ミシェル・アンの身体論

学位申請者： 服部 敬弘

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 庭田 茂吉

副査： 文学研究科 教授 工藤 和男

副査： 文学研究科 教授 林 克樹

要旨：

本論文は、メヌ・ド・ビランの身体論との対決の書である『身体の哲学と現象学』を中心に、ミシェル・アンの身体論を体系的に取り上げ、これまで多くの研究者や注釈者によって指摘されてきた、アン哲学のいわゆる内在と超越の存在論的二元論のアポリアの発生現場に立ち帰り、その哲学史的由来や来歴、論理的源泉や問題の所在に関して徹底的な解明を試みたものである。その際、著者は、身体をめぐるビラニスムとの対決を、カントが西洋形而上学にもたらした、分析判断と総合判断との、あるいは形式論理学と超越論的論理学との、区別および両者の根源的關係という困難をめぐる哲学史上のさまざまな問題の文脈のなかに位置づけ、従来の現象学やハイデガーとの関連においてだけでなく、カント的な問題構成のもとで読み解くという類例を見ない観点に立ち、きわめて刺激的な結論に到る。すなわち、アン哲学のアポリアとはカント以前の分析判断、および形式論理学の優位に由来するというものである。

本論文は「序論」、第一章「ビラニスムの再構築」、第二章「ビラン解釈の根本争点：総合の問題」、第三章「主観的身体の様態化と超越論的経験の意味」、第四章「実体性への回帰と『罪』の問題」、「結論」から成る。第一章では、アンの独創性がいかんなく発揮された、主観的身体の理論に基づき、意志、努力、運動をめぐるビラン身体論との詳細な比較検討が行われる。第二章では、アンとビランとの最大の対立点である有機的身体が取り上げられ、アン身体論の根本的前提の解明がなされる。第三章では、アン哲学を終生規定することになる主観的身体の様態化が問題になり、その意味が追求される。第四章では、この様態化の議論が実体-様態関係に依拠する伝統的図式の反復にほかならない点が論証される。最後に、本論文の結論として、アン哲学の存在論的二元論のアポリアの隠された前提である分析原理および形式論理学への回帰が主張される。

本論文の意義は、著者独自の視点である、カント哲学との対決という文脈でアンの身体論の体系的読解を試み、その隠された前提を徹底的に解明し、アン哲学のアポリアが何に存するかをあますところなく暴露した、きわめて独創的かつ生産的な論文である。よって、本論文は、博士（哲学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものと認められる。

総合試験結果の要旨

2013年1月15日

論文題目： ミシェル・アンリの身体論

学位申請者： 服部 敬弘

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 庭田 茂吉

副査： 文学研究科 教授 工藤 和男

副査： 文学研究科 教授 林 克樹

要 旨：

上記審査委員は、学位申請者服部敬弘氏に対する総合試験を2013年1月9日午後1時から、約3時間実施した。

総合審査において、学位申請者は、提出された論文の内容かつ関連事項に関する口頭試問に対して、適切に応答し、論文の意義とその研究水準の高さを示すとともに、主題の背景となる哲学史的な理解、および現代の哲学的課題についても、広範な専門的知識や深い教養をそなえていることを証明した。

また、語学試験（フランス語、英語）においても、学位申請者が研究上要求される外国語文献の読解能力を十分に有していることが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認められる。

博士學位論文要旨

論文題目： ミシェル・アンの身体論

氏名： 服部 敬弘

要旨：

本論は、ミシェル・アンの初期著作『身体の哲学と現象学』に照準し、独自のビラン解釈によって構築されるアン独自の身体理論を体系的に解明すると同時に、ビラニズムとの暗黙の対立を通じて浮かび上がるアン思想の根本前提を析出することを目的とする。

アンの哲学は、「内在」と「超越」の二元論にしたがって、感情や身体運動等、知覚に回収されない諸経験を独自の概念を用いて記述し、新たな現象学的探究領野を開拓した存在論とみなされてきた。その一方で、この二元論的存在論に対しては、自己性を担保する内在と異他性を開示する超越との曖昧な関係性が問題視され、今日でも、後期アンのキリスト教解釈をも貫くアン存在論の根本的難点とみなされている。本論は、アンの本質的な存在論的諸前提を内包するにもかかわらずこれまで断片的にしか論じられなかった身体論を包括的に論究することによって、アン存在論の核心的契機を探り、その射程と限界の測定を目指すものである。

この目的に沿って、本論は、第一に、ビランの著作及び関連資料の文献学的考証に依拠しながら、アンの身体論にかかわるテキストを統合的に分析することで、アンの「主観的身体」の理論を俯瞰し、アンによるビラニズム再構築の具体的経緯を詳解する。第二に、こうした一連のビラン解釈を一貫して規定する地平を主題化することで、ビラン解釈の核心的前提を解明する。

以上の目的と方法に従って、本論の考察を以下の手順で進める。

第一章では、アンの主観的身体の理論を、意志、努力、運動の解釈を通じて概観し、ビランの身体論との詳細な比較検討を行いながら、アンの独自の読解によるビラニズムの再構築過程を追跡する。

第一節において、まずアンが超越論的内的経験の概念を、ビランの直接的覚知の概念を手掛かりに、意志作用の直接経験として彫琢していく過程を概観する。特にアンは、潜勢的意志と現勢的努力との直接的関係を、意志作用の自己顕現として解釈し、超越論的内的経験のなかに組み込む。この意志作用の自己顕現が、次に身体運動と同一視され、身体の自発的運動と非自発的運動との区別を成立させる努力の感情が、身体運動一般の経験として解釈される。第二節は、この努力と運動を同一の現象として統合するアンの解釈を確認する。

第三節では、「意志と努力の直接性」及び「努力と運動の同一化」を中心に展開するアンの解釈を踏まえたうえで、この解釈においてビランによる位置づけと際立って異なる「有機的抵抗」の概念に注目する。有機的抵抗の哲学史的起源を、ビランのテキストをもとにライプニッツの無限小概念にまで遡及したうえで、有機的抵抗の概念において賭けられている哲学的争点のひとつを、「努力と抵抗の不可分性」へと収斂させる。第四節では、この有機的抵抗の解釈をめぐるアンとビランとの相違点を、さらに「記憶」の解釈を例にとって具体的に論じる。ここで、自我の恒常性を専ら純粋な努力において把握するアンが、それを努力と抵抗の相関性において捉えるビランと鋭く対立する点、またこの対立が抵抗の「総合的」性格をめぐる対立である点を明らかにする。この対立は、運動の解釈においても引き継がれる。結果、意志と努力の直接性を特権化し運動を努力へ統合することによってビラニズムの再構築を図るアンの解釈が、努力と抵抗の相関性に依拠するビラニズムと根本的に対立する試みとして浮かびあがる。

このアンとビランとの暗黙の対立の本質的意味を考究することを通じて、アン身体論の根本前提への接近を準備するのが、第二章である。

第一節では、ラニョーやブランシュヴィックによるビラン解釈への参照によって、ビラニズムの論理学的前提に光を当てると同時に、この前提を身体論へと昇華する際にビラン自身が陥る理論的不備を具体的に示す。そして一連の古典的なビラン解釈とアンリのビラン解釈とに通底する中心的な争点を四つに整理し、それを、実在性の真理、分析原理、アプリアリな総合原理、及びアポストリアリな総合原理という四つの原理として提示する。

ビラニズムの理論的不備（分析原理と総合原理の関係規定、及びアプリアリな総合原理とアポストリアリな総合原理の関係規定）は、アンリの有機的身体の解釈にも影を落とし、アンリ自身にも有機的体をめぐって相反する記述を残させることになる。第二節はこの点に注目し、有機的身体の記述の齟齬が、分析原理と総合原理との困難な関係を示している点を確認する。

ビラニズムにすでに内蔵された有機的身体の両義的位置付けは、この困難と表裏一体である。これに対して、抵抗する連続体において表現される時間性格のアンリ的解釈が、実質的にはこの困難への理論的対応として機能する点を、サルトル『想像力の問題』へのアンリの注釈（第三節）、さらにヴァンクールのビラン解釈への参照（第四節）によって明らかにする。この主観的身体の理論に即した時間概念の再解釈は、時間の創造や構成という観念の導入を伴うが、この観念の導入の意味が、ビラニズムの両義性の払拭にある点を明らかにする。以上の考察から、アンリのビラン解釈の意図が、アンリによるビラニズムの両義性の解消として解釈されるに至る。

しかし、ビラニズムの両義性解消のために導入された「創造」や「構成」という観念は、同時に主観的身体の理論的核心にかかわるものである。第三章は、この点を「主観的身体の様態化」の議論の分析を通じて追究する。

第一節では、アンリが「有機的身体の構成理論」において、まず努力の覚知によって同一的なものとどまり続ける主観的体が、いかに多様な内容を創造、あるいは構成するかという問いへのアンリの答えが、主観的身体の様態化にある点を確認し、ここにビランとの決定的な違いがあることを論じる。第二節では、主観的身体の様態化を「運動的志向性」とみなし、この志向性によって展開される地平を（超越の所産である「可視性の場」とは区別された）「同質的場」とみなす解釈を提示する。また同時に、運動的志向性をキネステーゼとみなす従来のアンリ解釈を検討し、努力と有機的抵抗を分離する主観的身体の理論は、身体運動と感覚的所与との不可分性を前提するキネステーゼ概念を原理的に許容しえないことを主張する。

第三節では、この主観的身体の様態化こそが、超越論的内的経験を超越的経験たらしめているものであることを確認したうえで、次の問いを検討する。主観的身体の理論は、超越論的内的経験を世界経験にまで拡張する際、純粋な自己同一性から世界経験の実質的内容を調達しようとするために、第一に自我の形式的同一性に実在を付与する古典的実体概念を召喚してはいないかどうか、第二に「同質性の場」の展開構造に実体 - 様態関係を援用することで、結果的に主観的身体の世界経験を分析判断の形式に専一的に従属させてはいないかという問いである。

第四章は、前章の問題提起を、『身体』最終章においてキリスト教の人間学へと応用される主観的身体の議論に即してさらに検討する。

第一節では、アンリが『身体』最終章の受動性の議論に着手するにあたって、ヴァンクールによって提出された実体性の覚知をめぐる問いを継承している点を明らかにする。意志の実体性を担保するためにアンリは連続的努力から持続的意志への移行を可能にする志向性を導入する。第二節では、こうした移行の過程をキリスト教的身体概念の解釈を通じて展開する『身体』の分析を追跡する。ここでは、自己の外へと企投する性的志向性が罪の規定として解釈される一方、自我の恒常性へと向かう信仰の志向性が救済の規定として解釈される。この解釈は、霊と肉のパウロ的対立を最終的に主観的身体の諸様態とみなす解釈へとアンリを導く。罪の身体と復活の身体など、キリスト教の諸規定が、可謬性と不可謬性、偶然性と必然性、相関性と内属性といった古典的カテゴリーの区分を前提する点、こうした対立が、実質的にはキリスト教神学ではなく、専らビラン解釈において前提された実体 - 様態関係に基づいて解釈されている点を明らかにする。

以上の一連の考察によって得られた結論は、以下の通りである。

第一に、超越論的内的経験＝意志の直接覚知によって意志作用の自己顕現の構造を明らかにした点、第二にこの顕現様態を感性的経験に敷衍することで、自我と世界との関係をめぐるビラニスムの両義性を払拭した点は、アンリ身体論の成果とみなすことができる。したがって『身体』は、確かにビラニスムの独創的解釈を通じて統一的な体系的身体論を構築した。しかし、アンリの身体論は、ビランとともに分析判断と総合判断の分水嶺の上に身を置きながら、この分裂を前者の優位性へと解消することで架橋をはかるために、両者の還元不可能な差異を説明困難にする。努力と抵抗の相関性に定位するビラニスムのテーゼを退け、実体的で同一的な意志作用とその様態化の関係を代替するからである。これは、初期スピノザ論以来、自我の自己性が体現する本質と実存の合致を担保するために護持しつづけるアンリの基本前提でもある。その意味で、アンリの身体論は、『顕現の本質』における存在論的カント解釈との対決に先立って、カントの超越論的論理学によって企てられた古典的実体概念の存在論的破壊に対する一貫した理論的抵抗の開始点を成すと同時に、意志の直接覚知を絶対化し全身体現象を主観的身体の様態へと解消することで、アンリ存在論の根本的困難の原型を構成すると結論することができる。